第四章　座談会「人見の今昔」

【出席者】

▼守　清次郎
▼守　久治
▼高橋　敏男
▼高橋　秋蔵
▼白井　吉男
▼秋元　康太郎
▼石井　正次
▼宮崎　喜久雄
▼守　正義
▼宮崎　要策
▼斉藤　茂
▼守　義雄
▼小松　喜一
▼鈴木　明（司会）

守（清）　本日はお忙しいところ出席していただきましてありがとうございます。おかげさまで記念誌の編集も着実に進捗し、この座談会で企画的なものは最終段階を迎えることになります。もちろん編集の方は調整や校正、レイアウトといった作業があり、まだまだ時間的にはかかりますが、座談会がまとまれば一応、峠を越したということができます。

本日の座談会は、「人見の今昔」をテーマに、いわば記事にしにくい泥臭い話をしていただきたいわけでして、忌憚なくそして気楽に進行させていただきたいと思います。

司会　今、理事長から話がありましたように、本文ではどうしても書きづらい面、それでいて残しておきたいことを中心に座談会を展開したいと思いますが、まず最初に今回の編集に当たっての苦労話をお聞かせいただきましょうか。

高橋（敏）　苦労した点といえば、やはりいかに真実を追求し、それに近づいていくかということでしょうね。ともかく資料があまりなかったし、捏造（ねつぞう）するわけにいかない。後世に嘘を残すわけにはいきませんからね。

秋元　同感だな。幸い旧名主の守八郎さんのところに古文書が沢山残っていて、その点は助かった。

小松　昔は毛筆だけど、皆、上手なのには感心した。

高橋（敏）　それと沖合漁業関係の資料で同一事項を扱っていながらかなりニュアンス

の違うものがあった。どちらをとればよいのか判断に迷った。

司会　その点はどうしましたか。

高橋（敏）　さらにいろいろの資料や、古老の話などを総合して判断せざるを得なかった。それが限界でしょう。

守（正）　私も同じような経験をした。三人三様というのがあって困った。

宮崎（要）　資料を集めるのが大変だった。ともかく見当がつかないし、足で稼ぐ以外になかった。

宮崎（喜）　残念だったのは、もう一〇年か一五年ぐらい前、このような計画があればよかったでしょうね。そして、われわれもまた隙（ひま）を惜しまず古い話を聞いておけばよかったという後悔を、しみじみと感じた。

石井　同感ですね。当時はさして興味もなかったから、つい聞き流しにしていた。（笑）

白井　話を聞いても、それを文章にするのが大変で、なんでこの年になってこんな苦労をしないといけないのか、（笑）自問自答の連続だった。

石井　その点は皆、共通しているんじゃないかな。（笑）

白井　日ごろ新聞や雑誌はなにげなく読んでいるけど、書くというのは難儀だね。（笑）

石井　どう表現すればよいのか、ともかく悩みはつきなかった。（笑）

守（久）　神社・仏閣を担当したけど、石碑の碑文が風化して、読みづらいものが多かった。一つの碑文を調査するのに、青蓮寺に一週間通った。（笑）それと年代が判別できないものがあった。

司会　どうしましたか。

人見の今昔について活発な話が交わされた座談会

守（久）　不明なものは□印で逃げた。ともかく嘘は書けないのでそれ以上に方法がなかった。それとやはり資料が足りず苦労した。千葉まで出かけたこともあります。

司会　書く方はどうでしたか。

守（久）　何度も何度も書きなおした。（笑）平均してどの記事も四回ぐらい書き直しています。（笑）

斉藤　古老にかなり聞いたけど、まず年代が不明なのに苦労した。

司会　自分の年齢もわからなくなるぐらいのお年だろうから…。（笑）

小松　小笠原陣屋のことを調査したけど、どうも的確な状況がつかめなかった。だから表現もぼかさざるをえない。（笑）

守（清）　苦労が目に見えるようですね。その悪戦苦闘のなかであれだけの資料と原稿を出していただいて深く感謝します。なんとしても良い記念誌にしたいですね。

高橋（秋）　この記念誌を出すと、今後、これが教科書になる可能性がある。そういう意味では調査不十分なところもあって怖い。いつか歴史に興味をもつ後輩がいたら、もっともっと突っ込んで真相を究明してもらいたい。

司会　それにしても、人見の郷土誌ができるというのは初めてのことでしょうし、意義のあることと思います。この集大成に挑んだ皆さんの努力は評価されることでしょう。ところで、幼いころを思い出して、それなりに印象に残っていることといえばどんなことですか。

守（久）　漁師や百姓の子どもはなかなか優等生になれなかった。

司会　それはまたどうしてですか。

守（久）　それだけ封建的だったのではないだろうか。家柄とか職業で差別があったような気がする。

秋元　第一、学問はいらないという風潮が強かった。どうせ漁師になるのだから、学問より農業や漁業の実践を重んじた。子供もそういう感覚が強かったんじゃないのかな…。

宮崎（喜）　子供のころは農繁休暇があった。

高橋（秋）　たしか田植え時期で、一週間ぐらいの期間だった。（笑）

宮崎（喜）　国語読本にも「農村用」という注釈がついていた。（笑）

宮崎（要）　親としても、勉強のできる子供は家業を放棄するんじゃないかという危惧があったように思う。（笑）事実、そういうことを言う親がいた。（笑）

石井　特に女性に対してはその風潮が強かった。

司会　当時の小学生の服装は？

宮崎（喜）　カスリの着物に、フロシキのカバン、はだしで通う子供が多かった。（笑）

守（義）　井戸端で足を洗って教室に入ったもんだね。（笑）

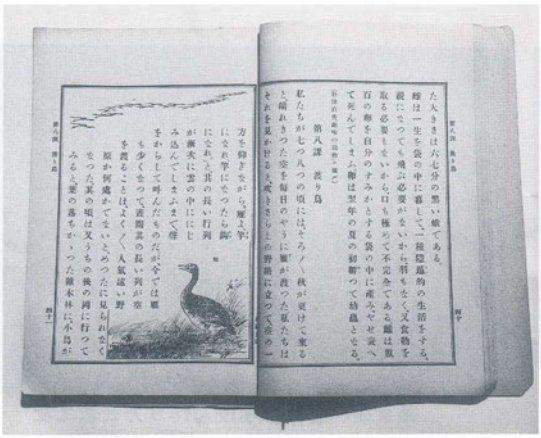
宮崎（要）　昔は兄妹が多いから赤ん坊をおぶってくる子もいた。（笑）黒板に名前を書いて子守りとすれば、早退でも出席となった。（笑）

守（正）　本当に懐かしい時代だね。今じゃ想像もできない。

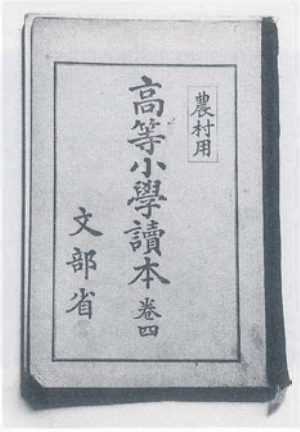
石井　入学式のときほとんどカスリの着物だったのが印象に残っている。

守（義）　少し貧しい家庭はシマの地織の着物だった。袖口で鼻汁を拭くものだから袖がテカテカ光っていたものだ。（笑）

宮崎（要）　それも六年の卒業式のときは着物と洋服が半々だった。



農村用高等小学読本の第八課「渡り鳥」



農村用の高等小学読本

斉藤　われわれの時代、つまり昭和初期は圧倒的に着物が多かった。洋服の子供は一クラス三人ぐらいいたかな。洋服の子供はもちろん裕福な家庭でランドセルだった。

司会　そのころの一クラスというと？

斉藤　五、六〇人ぐらいだった。

秋元　本を風呂敷に包むものだから、通学の途中、よく本が風呂敷からこぼれたものだ。（笑）

斉藤　それと弁当を腰に巻いていった。（笑）腰に巻くと、腰は暖ったかいし、また弁当も冷めにくかった。

高橋（秋）　生活の知恵かな。（笑）

秋元　冬など弁当を窓際の日当りの良い所に置いたものだね。

宮崎（喜）　戦時中、チャイナ靴が配給になった。

守（義）　そうだった。そうだった。靴ヒモのないやつね。

斉藤　われわれのころはハダシか藁草履だった。

宮崎（喜）　小学校の手工の時間に藁草履の作りかたの教科があった。（笑）

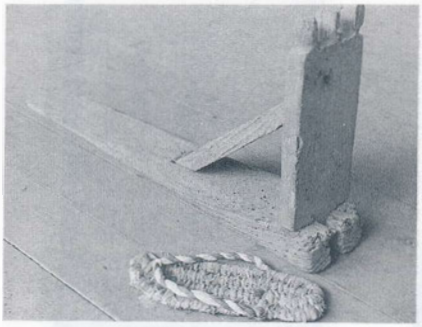
小松　昭和五・六年ごろ、はやりの長靴が履きたくて、雪が降るように祈った記憶がある。

司会　弁当のおかずはどんなものでしたか。

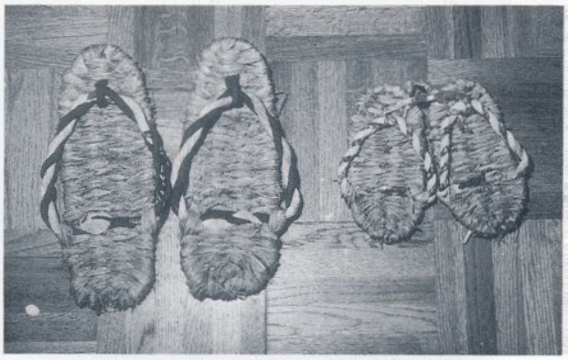
斉藤　カツオ節をかいたものとか、梅干しが主体だった。

守（義）　梅干の酸で弁当箱のフタに穴があいたものだ。（笑）

高橋（敏）　弁当箱のフタにお茶代りのお湯を注いだものだけど、穴のあいたフタは技



藁草履作り具



藁草履、昔は小学校で作り方を教えた

術を要した。

白井　そうそう。フタを少し傾けてね…。（笑）

高橋　海苔を焼いて醤油をつけ、それをご飯の上に並べたりね…。

秋元　ちょっと良い弁当になるとツクダニとかおぼろだった。

小松　当時、鮭はわりに安かったような気がする。

白井　玉子なんて最高のおかずだったからね。

守（久）　それから考えると、まさに飽食の時代になったものですね。それとモチを焼いて醤油につけ、それを新聞紙に包んで持っていったのを記憶している。

高橋（秋）　岡の子供に多かった。漁師の子供たちはよく海苔巻きと交換したね。

守（久）　餅に新聞紙がくっついてね。（笑）

守（正）　おむすびを囲炉裏で焼いて、味噌を塗るのもおいしかった。

秋元　やんごめ（焼き米）もあった。

司会　種籾を使いましたね。

斉藤　そう。種籾の残りがもったいないのでやんごめにしたわけで、煎ってから籾殻をとる。

守（義）　籾殻をとるのに昔は臼で搗いたもんだ。

斉藤　籾殻をとった玄米に、小豆を入れ、さらに砂糖を加えて煮るわけだけど、ちょうど赤飯のような色をしていた。甘くておいしいものでしたよ。今でも清和の大正屋で食わしてくれる。

秋元　残った冷飯を干飯にしたもんだね。一回洗って天日に干して作るものだけど、い

籾すり臼、唐臼ともいった

唐箕。穀物の実と殻を精選するのに使用した

わば昔の武士の戦場食の一つだった。それを炒って食べるのだが、ポリポリして意外においしかった。

守（義）　物のない時代だったから、何を食べてもおいしかった。（笑）

斉藤　現在は物が豊富だから、そんな面倒なものは作らなくなった。

宮崎（要）　おこげのおむすびがおいしかったね。

宮崎（喜）　そうそう。昔はかまどで、鉄釜で炊いたご飯の底には必ず狐色のおこげができた。少し醤油を加えておむすびを作ったものだ。

高橋（秋）　おむすびといえば、浅蜊ご飯を思い出すね。よく子供のおやつなどにしたものだ。

白井　そうそう、浅蜊のにんごといった。

守（義）　浅蜊といえばフォーカシと言う言葉もしだいに聞かれなくなった。

高橋（敏）　語源はよくわからないが、浅蜊が多くはいった味噌汁をフォーカシといったね。

秋元　かき餅もあったね。

小松　さと芋の摺ったのを餅に入れると、焼いたときふくらみもよいし、なかなか固くならなかった。

守（久）　戦時中の食糧は本当に大変だった。農家は米を供出して、その米を今度は配給で貰った。（笑）

守（義）　自分で作ったものさえままにならない時代だった。

小松　砂糖とか生活物資はほとんど配給だった。

高橋（秋）　戦中、戦後はまさに飢餓の時代だったといってよい。

石井　都会からよく買出しに来ていた。衣料と米とか芋の物々交換をするわけ。

守（正）　あくまで内緒で、警察に見つかると没収された。生きるのに必死な時代だから皆、死にもの狂いだった。

守（久）　なんでも食べたね。ジャガイモ、サツマイモを焚き込んだご飯はよい方だった。

宮崎（要）　ＮＨＫのドラマで有名になった「おしん」じゃないけど、大根飯も食べた。（笑）

守（久）　桑の実や槙（まき）の実も食べた。（笑）

守（清）　食べると口の周りが紫色になって、すぐわかった。（笑）

小松　今じゃ誰も見向きもしないねえ。（笑）

宮崎（喜）　中富で養蚕をやっていて、小糸川左岸に桑畑があった。

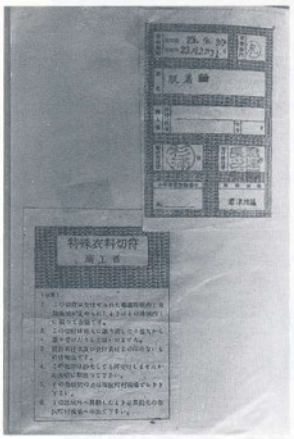
斉藤　学校の帰りに空の弁当箱にいっぱい取って帰ったものだけど、桑の木を痛めるのでよく叱られた。（笑）

宮崎（要）　戦時中、学校も毎週一回は日の丸弁当といって、梅干し一箇のおかずだった。

白井　今、思うと懐かしいねえー。

石井　そういう意味じゃ、今の人は不幸なのかもしれない。まさに飽食の時代だが、今の時代の人たちはあまりにも恵まれていて、食物のありがたさが薄れている。

高橋（秋）　よいことばかりが続くとは思われない。いつかまた食糧難の時代がくると



戦時中は衣料から、塩などの食用品までほとんどが配給制に変わった

いう説もある。

司会　遊びの方で印象に残っているのはどんなことですか。

秋元　子供の遊びといえば、正月は凧揚げ、コマ、羽子板など。一般的な遊びといえば、竹馬、お手玉、おはじき、ままごと、メンコ、戦争ゴッコ…。

守（正）　陣取り合戦やかくれんぼ、クモの喧嘩などもあった。

守（清）　われわれの時代は、自分で道具を作って遊んだ。今みたいに高級なものはないけど、ほとんど手製だった。

高橋（敏）　物を作る喜びというのがあったね。

宮崎（要）　同感だね。鉛筆削りと工作をかねて、肥後守のナイフをほとんどの子供が首に吊して持ち歩いたものだ。

秋元　昔は今と違って、遊びも限定されていた。

白井　一般に青年は、昼間は海や農作業をやっていたから、やはり夜遊びでしょうね。その点、人見は大堀の繁華街が近かったから、劇場もあったし、買物もできたし…。

司会　当時の服装は？

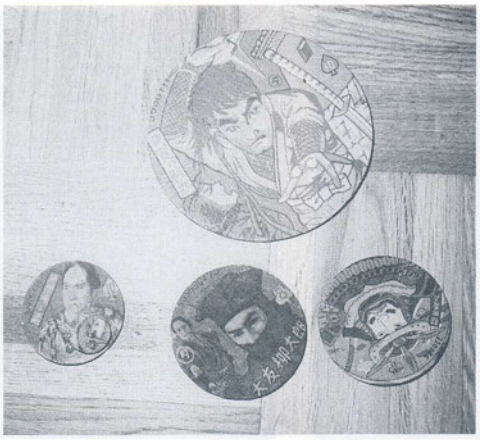
斉藤　服装は浜の方が派手だった。

白井　そうだねえー。夏はポーラーの着物、冬は着物の上にサージの外套を着て…。

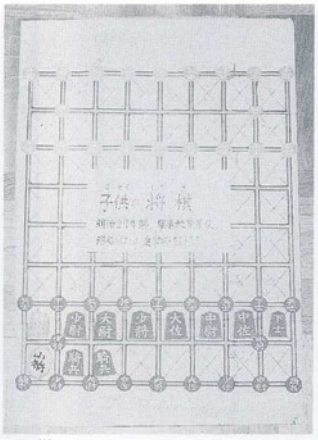
秋元　昔はフイゴ祭りというのがあった。

宮崎（喜）　そうそう。鍛冶屋に行くと蜜柑をくれた。そんなお祭りがやはり男女のコミュニケーションの場だった。

斉藤　当時の夜遊びといっても可愛いものだった。夜の街をふらついて一三銭の支那ソ



メンコ＝相川資料館提供



子供の将棋＝相川資料館提供

バを食べるのが楽しみだった。ソバ屋に精勤すると提灯をくれた。

宮崎（要） 男女の交際も必然的に夜ということになる。

高橋（敏） いつの時代でも若者たちの関心は男女の交際だけど、いろいろあったねえー。

宮崎（要） 目的の娘の所へよく通ったものだ。（笑）

秋元 女性の方の親にも二通りあって、寛容な親と、厳格な親の両方があった。

宮崎（要） 寛容な親の場合はよく家に遊びに行ったものだけど、しかし、家の手伝いをよくさせられた。（笑）

小松 海苔簀の葉もぎなど夜なべでやったものだ。（笑）

宮崎（喜） 地遊びというのを嫌う傾向があった。だから大堀とか他の地区へ行った。

石井 それも生活の知恵だったんじゃないかな。地区内は姻戚（いんせき）関係が多いし、血族結婚の可能性も高くなるからね。

宮崎（要） 若者たちによる縄張り争いもあったね。

守（久） 厳しい親というのは、やはり男女の間違いを警戒したんだろうけど、若者たちにはそんな親の心配を理解できないものだから、よく悪戯をした。（笑）

小松 井戸の中に籾殻を入れたり、ひどいのは墓石を持ってきて門口に置いたり…。（笑）

秋元 その家に実っているカキやミカンをもぎって、庭に並べたりね…。（笑）

宮崎（喜） 毎晩、よく歩き回ったもんだ。（笑）

斉藤 人の性格もあるだろうけど、団体行動をする若者と、一人でこそこそ歩き回るのもいた。

十二支合わせ＝相川資料館提供

守（久）　稲叢（いなびら）のかげでデイトしている男女をよく見かけた。

守（正）　今、考えると懐かしい。なんとも牧歌的だね。

秋元　話は違うけど、西瓜泥棒にいって下肥の溜に落ちたのもいた。（笑）

宮崎（喜）　中橋の踏み板をはずすのもやった。（笑）ともかくよく悪戯をしたものだが、現在だったらかなり問題になるだろうね。

秋元　被害届けなんて出なかったものね。〝どうせ若者がやったんだろう〟ですんでいた。

高橋（敏）　昔は皆、おおらかだった。（笑）

宮崎（喜）　でも戦争が激しくなるにつれて、夜遊びにしろ、悪戯にしろ少しきびしくなった。

司会　海苔や農業についての思い出は？

石井　小学生のころよく苗代で、ニカメイ虫の駆除をさせられた。

守（清）　そうだった。学校の教科の一つに繰り入れられていて、たしか四年生になると先生に引率されていったのを覚えている。

司会　県の命令で、役場の人や区長も出てきたものだった。苗に白い卵を生みつけていて、それをとったものですね。

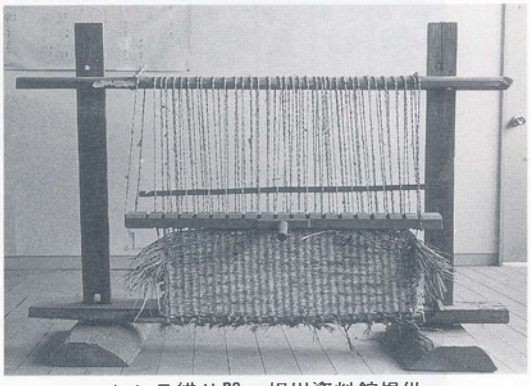
斉藤　ニカメイ虫の駆除は明治からやっていたらしい。

秋元　田圃は蛭（ヒル）がいて、よくやられたものだ。（笑）

守（久）　昔の肥料は人糞が多かったから、ときどき生のやつが浮いていた。（笑）

守（清）　もうそんな農作業もだんだん見られなくなる。

俵作り具＝相川資料館提供



むしろ織り器＝相川資料館提供

司会　漁業の方はどうですか？

守（正）　入漁制度が実施されて、人見は金田や中島で海苔養殖ができるようになった。当時、一六号線は一時間に一本ぐらいしかバスがなく、荷物もあることから網を自転車に積んでよく出かけたものです。

石井　そうだった。帰りに木更津の三好屋で甘いものを食べるのが楽しみで…。（笑）

守（義）　辛党は山孝で梅割り焼酎…。（笑）

宮崎（要）　原付オートバイで出かける人もいた。

宮崎（喜）　海苔はたしかに良い収入だったけど、労働も大変だった。

守（正）　簀の建込み、抜き取りなどすべて手作業だからね。

宮崎（要）　手首が痛くなってね。特に簀の抜き取りは引き潮のとき、海苔取り舟を三艘横につないでいくのだけど、五月の強い南風にあおられて、舟が流され、遭難した人もいる。

小松　大八車を二人で引いていったものだ。砂浜だから、ともかく車が重くて苦労した。

宮崎（喜）　牛車で行く人もいたけど、牛も大変だったことだろう。足を折り曲げて車を引く牛がいたもんね。

石井　昭和一〇年ごろ、牛車は五〇円ぐらいだったかな。当時、五〇円は大金だった。

斉藤　夜建ても大変だった。

司会　というと…。

斉藤　つまり簀が流されて、その箇所へふたたび簀を建てるわけだけど、それがほとんど夜の作業だった。モモヒキをはいてハダシで行くわけだけど、それは大変だった。第

蓄音機＝相川資料館提供

一寒いし、手作業だし…。

守（正）　三月ごろになると徒歩（かち）どりといって、徒歩で海苔取りに行くのだけど、まだ海が冷たくてすごくつらかった。

高橋（敏）　素足だからね、後では長靴を使用するようになったけど…。

小松　海苔網を担いで動くんだけどとにかく重たかった。

高橋（秋）　私も漁具を運ぶのに苦労した。

白井　苦労したというのが実感でしょうね。嬉しいのは海苔を換金したときだけ…。

宮崎（喜）　思い出すのは寒中の海苔取りで、よく舟べりに手をぶつけたけど、あれはともかく痛かった。

石井　あの痛さとしびれは経験した人でないとわからない。（笑）

小松　波打ち際の海面が氷るときもあったですね。

司会　凍氷（しが）といった。

小松　そう。かなり大きな塊があったものだけど、最近は見ないね。

秋元　たしか昭和三〇年だったと思うけど、貨物船が重油を海に放棄して大被害を蒙ったことがある。

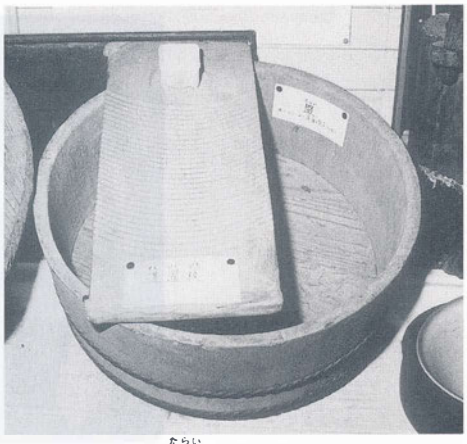
高橋（秋）　そうだった。

秋元　海苔が乾燥するにつれて油が溶けて、ともかく使いものにならなかった。

高橋（敏）　重油の被害はその後もあった。

守（久）　油をピンセットで除去したのを覚えている。それでも油臭かった。

白井　でも食べたんじゃないかな。（笑）



洗濯板と盥（たらい）＝相川資料館提供

守（清）　新聞でも大きくとりあげたけど、結局、補償はされなかった。

高橋（敏）　戦後、木更津の現自衛隊基地が米軍の基地であったとき、飛行機を輸送する舟が流れて、簀柵をこわしたことがあった。

白井　あれも補償は出なかった。

石井　海苔養殖は自然が相手だっただけに、その制約をかなり受けた。

高橋（敏）　雨の日とか曇った日の海苔乾燥が大変だった。

石井　天候が急変し、雨になると乾かした海苔を取り込むのだけど、海苔が縮んで品質は悪くなるし、価格も下がった。

守（正）　手間がかかったうえに、価格が下がったんじゃとてもじゃない。（笑）それにしても子供たちはよく加勢したものだ。海苔干しも子供がよく手伝った。

司会　そのほかに困ったことは？

石井　やはり女性の海でのトイレじゃないかな。（笑）

守（久）　海は冷えるからトイレも近くなる。

石井　しかし、皆器用だった。（笑）舟を傾けて、簀の棒につかまって用を足していたけど、やはり女性は困ったでしょうね。

斉藤　女性は一般に我慢強いからできるだけ辛抱していたのだろうけど、やはり大変だったと思う。用を足そうとして海に落ちた人もいる。（笑）

秋元　男はその点よかった。仕事しながら知らぬ顔で用が足せた。（笑）

宮崎（要）　海の仕事は干汐時という時間の制約があるので、とかく戦場と同じように皆、殺気だっていたからな。上品なことなどいっちゃおれない。（笑）

高橋（秋）　大きな声をはりあげないと聞こえないし、どうしても海の仕事というのは気性を強くしないといけない。

秋元　小糸川の潮止めに舟通しがあって、海苔取りの帰りの干潮時はあそこは急流で苦労した。

高橋（秋）　舟の転覆事故もあった。

守（久）　そういうときは全員で協力する、そんな風潮が人見の協調関係や団結心を醸成することにもなったと思う。

石井　海苔養殖は自然が相手の仕事だったし、当然のことながら年によって、あるいは場所によって収穫の差があった。

司会　皆さんの若いころのお小遣いはどうして工面したのですか。

白井　やはり親から貰う以外にない。父親から月々にもらっていたけど、ちょいちょいお袋にねだったものだ。

小松　母親のほうがごまかしやすかった？（笑）

斉藤　正月、お祭りなど特別にお小遣がでたけど、足りないときはお袋にねだった。（笑）しかし、当時は使うとしても映画とか支那ソバを食べるとか、そんなに小遣はいらなかった。

白井　遊び場所もさほどないし、娯楽にしても少なかった。その点、今は出ると珍しいものや遊び場所があるし、すべて金ということになる。（笑）

宮崎（喜）　拾い海苔も結構、小遣かせぎになった。

斉藤　米俵を持ち出して、小遣銭を工面する人もいた。（笑）

守（清）　人見の人は一般に、まじめだったんじゃないかな。賭事をして身代を潰す人もいなかったし。

高橋（敏）　本当にまじめな人が多かった。他所の漁区では博奕（ばくち）による身代騒ぎもあったけど…。

秋元　特に戦時中は、その遊びでさえ制約された。

守（久）　昔、お祭りというと町内ごとに幟（のぼり）や提灯を掲げたものだけど、現在は提灯は見られなくなった。

白井　道路が舗装されて、提灯がけの柱の穴をあけるのがやりにくくなったのが、その原因のようだね。

守（久）　人見神社の夏祭りにしても、昔の方がにぎやかで風情があったような気がする。これは懐古主義的な感傷じゃなくて。

高橋（秋）　そうかもしれない。それも海苔業と関係あるかもしれない。

守（清）　おそらく今後、人見浦で海苔養殖が行われることはないと思うが、苦労はあったにせよ、それが我々の時代で終わるのかと思うと、ちょっと寂しい気もする。

　時代の移り変わりといえば仕方ないが、後世の人たちにお願いしたいのは、漁場を譲渡した先人の決断を配慮して、この街の誇れる都市づくりをやってほしい。いわば街の変革の主導的立場を堅持してきた人見地区の誇りをいつまでも忘れないでほしい。

高橋（敏）　同感だな。決断の正しかったことが証明されなければ、我々を含めて祖先は浮かばれない。

守（清）　皆さんの貴重な時間をさいていただいて、昔話に花が咲きましたけど、非常

に楽しい座談会でした。

司会　どうも皆さんありがとうございました。